

鞭牛さまの出家

文 中野 東禪

牛に草をたべさせて、鞭牛は腰をおろしていた。荷をおろしたあとのせい、牛も鞭牛も、ほっと息をぬいていた。

その年の春に和井内村の母に死なれてから、鞭牛は考えこむことが多かった。牛方として、独身の気安さで何年かやってきたが、このところの不作といい、鉾山の先ゆきといい、それに、いつまでもわがままをしてもいられない己れの年齢といい、獺たとした不安がつみかさなっていた。それが、母親の死で、目にみえるほど、はつきりとした不安となってきたようである。

この日も、腰をおろして、つかれがとれてゆくと、いつのまにか考えこんでいた。いつきたものか、ひとりの坊さまが、鞭牛のすぐそばまで歩いてきていた。考えこんでいた鞭牛は、不安そうな眼を、そのまま、坊さまの方へ向けた。

坊さまは、時刻のあいさつをした。そしてどこへ行くのかねと聞いた。かさねて二言三言話をしているうちに、「なんじよだ（どうだ）、和尚になってみねが？」といった。牛方の鞭牛は「小僧だべ？」と軽口でこたえた。「なるほど、すぐに和尚になるわけでね（わけじゃない）。まず小僧がらきたえでぐわけだな。……なんじよだ、坊さんになってみねが」ふたたび念をおすように言う、そのしつかりとした声を聞いていて、鞭牛はふしぎな感情にとらわれはじめていた。

いったんは別れたが、このときの声が鞭牛の耳からはなれなかった。

それから、ひと月たった晩秋のころであった。栗林村の常楽寺をたずねたのは、鞭牛であった。

釜石の北、鶺鴒あひだのすまいの栗林村は、和井内村より五十キロは南であった。だが、今の鞭牛にとつて、声をかけてくれた坊さまは、何か、見えないもやもやとしたものを、はらしてくれそうな気がしはじめたのであった。

とにかく、あの坊さまにもう一度会って心をきめたかった。

こうして、牛方の鞭牛は出家をしたのである。得度とくどの師は、あるとき声をかけた、常楽寺三世、林応和尚であった。

そののち、どのように修学したかは定かでない。だが数年のちに、船越の海蔵寺十世の活動見牛和尚のもとで修行するようになった。この師は、鞭牛とほとんど同年齢であった。

山田町は、釜石と宮古のちょうど中間にあつて、山田湾という天然の漁場に恵まれていた。

いつのころからか、この地に流れついた一人の僧がいた。名を秀全といった。

船越の海蔵寺に住持する見牛和尚は、この秀全和尚と親しくなっていた。あるとき、秀全は、一字一石を血書で供養することを発願し、法華経を書写した。それは、山田湾につき出た半島の大浦部落に今ものこっている。

翌、元文三年のこと、秀全和尚は、どのような、心理的变化があつたが、見牛和尚にとつともないことを相談した。

それは、断食だんじきによつて入定にやうじやうしたいといふのであつた。入定というのは、座禅を組んで死ぬことである。

もちろん、見牛和尚は思いとどまるように説得した。

だが、それもほんのいつときで、秀全の決意をひるがえすことはできなかった。

秀全が断食に入ると、このうわさは村々へつたわり、多くの人がおがみにやつてきた。

二十七日の六月十二日、ひるごろ、きえいるように入定した。

このことは、土地の人々にとつて衝撃しやうげき的なできごとであつた。もちろん、見牛と鞭牛にとつても、いいしれぬ感情をわきたたせることであつた。

鞭牛二十九歳、秀全三十三歳であつた。

たまさか金山の発見があつたとはいえ、南部藩の財政はすでに極限までおちこんでいた。いくさがなくなつて久しいこんにち、馬を産出する南部藩にとつて軍馬の需要はへる一方である。そのうえ、三年前には、幕府領の駿府と遠州のさかいを流れる大井川の氾濫はんらんで決壊した、島田宿周辺四十五カ所の堤防の修築を命ぜられ、藩は、費用一万両と人足を、遠く静岡の地まで派遣はけんしてやりとげたばかりであつた。その負担は当然、藩役人の禄米天引と、領民からのとりたてとなつてきた。

それに、漁船の遭難、津波など、この地の人々の息苦しさはますますばかりであつた。

そんな中で、秀全和尚の一字一石血書供養、それにつづく断食入定は、模倣もかくとして、はらいのような息苦しさの中で、救いへの願望を、強烈な想念によつて集中させる、そんなふしぎな力にみちていた。

四年後、見牛和尚は、秀全和尚のために、文を選んで碑おそを建立した。施主は、田の浜の

源衛門の母であつた。

(つづく)